

## 資料・調査

中国返還後のマカエンセ (Macaense) のエスニシティ変容  
—マカエンセ20名への聞き取り調査およびアンケート全記録—(1)

内藤 理佳

## キーワード

マカエンセ (Macaense: 複数形Macaenses), ポルトガリダーデ (portugalidade), エスニック・アイデンティティ, エスニシティ

1. はじめに：マカエンセ (Macaense) とは<sup>(1)</sup>

現在, 中国の特別行政区の一つであるマカオ (澳門) は, 20世紀末 (1999年) まで約4世紀半にわたりポルトガルの統治下にあった。16世紀半ば, ポルトガルはマラッカ以東の東アジア貿易の根拠地としてマカオに来航後, 居住権を中国<sup>(2)</sup> (当時は明王朝) から明文化されない形で暗黙裡に獲得し, 以後事実上の植民地支配を展開していった。当初マカオに来航したポルトガル人のほぼ全員が男性であり, 彼らは徐々に現地の中国人または近隣アジア地域出身の女性たちと婚姻関係 (内縁関係を含む) を結び家族を構成するようになった。

- (1) 内藤理佳「中国返還後のマカエンセ (Macaense) のエスニシティ変容—マカオ在住マカエンセ16名への聞き取り調査から—」放送大学大学院 (2009), 流通経済大学流通情報学部紀要Vol.14 No.2, Vol.16 No.3 (2010) より部分的に抜粋しリライトを行った。
- (2) 本論において多用する「中国・中国人」の表現について以下の点に留意されたい。16世紀半ば以降, 大陸では漢民族および非漢民族王朝が明, 清, 中華民国, 中華人民共和国と政權交代を繰り返し, 「中国」「中国人」という社会的カテゴリーは中華民国成立以前には不在であった。よって本来なら, 当該時期のいわゆる「中国人」とその社会を表現する正確な表現としては「漢人」「漢人社会」が適切である。他方, 一般的に大陸を出て海外に定住し, その国の国籍を取得した者を「華人」と呼ぶため, ポルトガル国籍を持つ「中国系」住民を「華人」と記載するほうが好ましい場合も考えられる。しかし, 時代を問わず「中国」「中国人」という呼称を用いる文献が多いこと, また「華人」も広義の「中国人」に含まれることから, 本論文においてはこれらすべてを「中国」「中国人」に統一的に表記する。

こうして、ポルトガル人と、マカオならびに近辺アジア地域出身住民との通婚・「混血」<sup>(3)</sup>によって生まれたヨーロッパとアジアの「混血」であるユーラシアン (Eurasian), すなわち「ポルトガル人の血を受け継ぐ子孫」をマカエンセ (ポルトガル語: Macaense, 複数形 Macaenses) と呼ぶ。マカエンセを表すポルトガル語として、ほかにも *Filhos da terra* (かの地の子どもたち), *Os portugueses do oriente* (東洋のポルトガル人) がある。中国語でマカエンセを表す言葉としては、ポルトガル語の “*Filhos da terra*” に当たる「土生」「土生葡人」(“葡人”はポルトガル人を指す) が使用されている<sup>(4)</sup>。

マカオが事実上のポルトガル植民地となった19世紀半ばにはマカエンセのコミュニティがすでに形成されていた。ポルトガル統治時代、マカオ総督ならびに為政者としてポルトガル本国から送られてくるポルトガル人のほとんどは現地の言語である中国語(話し言葉は広東語)を学ぼうとはしなかった。いっぽう、マカオの一般中国系住民に対するポルトガル語教育もほとんど行なわれてこなかった〔塩出1999: 184〕<sup>(5)</sup>。そのためマカオ社会の上層部としてマカオ行政を司るポルトガル本国出身の少数のポルトガル人と、基層社会を構成する大多数の一般中国系住民との間にはとくに言語における超えがたい障壁があった。このような体制下、ポルトガル語を母語とし中国語(広東語)を理解し、ポルトガルと中国双方の文化にも親しいマカエンセが、マカオ社会を構成する他の二つのエスニック集団、すなわちポルトガル人コミュニティと中国人コミュニティの仲介者の役割を果たす中間層として、おもに行政機構(管理体制)における中間管理職的な立場や、警察官、弁護士、法務官、秘書官などの職業に就いた〔Cabral and Lourenço 1993: 23〕<sup>(6)</sup>。

マカエンセ・コミュニティは4世紀以上にわたり世代交代を重ね、人口の大多数が中国人であるマカオ社会におけるエスニック・マイノリティであり続けながらも、支配階層であったポルトガル人と強固で友好的な関係を保つことで、社会の中で安定した立場と「特権」を享受し、社会的・経済的に比較的恵まれた立場を築いていった。精神面では、返還前のマカエンセの別称として知られた「東洋のポルトガル人」(ポルトガル語: *os portugueses do oriente*) としての誇りを持ち、中国系一般住民に対するエリート意識を持った特徴的なエスニック・アイデンティティが形成されていった。

(3) 「混血」という語彙は現在一般的には好ましくないとされる傾向が強い。しかしマカエンセの出自を解説するにあたり、“miscegenation”(英語)もしくは“miscigenação”(ポルトガル語)の訳語として多用を余儀なくされるため、ここでは敢えて「」付けで使用する。

(4) 英語のマカニーズ (Macanese) ならびに日本語の「マカオ人」の呼称は、ポルトガル人の子孫のみならず広義の「マカオ住民」としての意味も有するため、ここでは使用しない。

(5) 塩出浩和『可能性としてのマカオ—曖昧都市の位相』亜紀書房 (1999)

(6) Cabral, João de Pina and N. Lourenço: *Em Terra de Tufões – Dinâmicas da Etnicidade Macaense*. Macau: Instituto Cultural de Macau (1993)

実は、16世紀の誕生以来現在に至るまで、マカエンセとは誰のことを指すのか、その正式な「定義」もしくは「マカエンセとしての必要条件」は明確にされていない。しかし、歴史上マカオ社会において、一般的に「マカエンセ」とは次のエスニック表徴を持つ人々のことであると考えられてきた。

#### 【出自としての表徴】

- ・ポルトガル人の「血」を（父方であれ母方であれ）引いている。
- ・マカオ生まれである。

#### 【文化的表徴】

- ・ポルトガル語を話す（多くの場合がポルトガル語を母語とする）。
- ・ポルトガル式の教育を受けている。
- ・キリスト教徒（カトリック）である。

#### 【精神的表徴】

- ・マカエンセであることを自認している。
- ・「自分はマカエンセである」ことがマカエンセ・コミュニティからも認められている。
- ・ポルトガルとの深い精神的な絆・つながりが、自己のエスニック・アイデンティティの中核にある。

16世紀半ばにマカエンセが誕生した際の基本的条件は「出自としての表徴」であった。その後、マカエンセ・コミュニティが形成・維持されていく過程で「文化的表徴」、「精神的表徴」が加わり一般的なマカエンセ像が作り上げられてきた。

現在のマカエンセ・コミュニティにおいて、マカエンセとしての必要条件であるのは「精神的表徴」のみであり、他は十分条件であっても必要条件ではない。精神的表徴のひとつである「ポルトガルとの深い精神的な絆・つながり」はポルトガル語で「ポルトガリダーデ」(portugalidade)という言葉で表現される。「ポルトガリダーデ」は、ほかにも「自分のエスニック・アイデンティティの根幹となる精神がポルトガルと強く結びついている」、「ポルトガル風の文化的価値観を自分の中に持っている」など、個人によってさまざまな表現方法が存在する。マカエンセなら誰しもが有する精神でありながら、きわめて習慣的・個人的な「情感的評価」であり、伽間の尺度をもって計測することが難しい精神性である。各個人によってそれぞれ持つ意味や重要性は少しずつ異なり、その明確な定義は存在しない。しかし、その「ポルトガリダーデ」こそが現在のマカエンセ・コミュニティのエスニシティの基本となり、最も重要なファクターであるとされている。

他言語への翻訳が非常に困難なこの「ポルトガリダーデ」という精神性（敢えて日本語に直訳すれば、「ポルトガルのなるもの」となろうか）について筆者は以下のように考える。マカエンセが生まれ育った東洋の一地域であるマカオとヨーロッパの西端に位置するポルトガルは地理的に遠く離れているだけではなく、当然のことながら両者の間には文化的に大きな隔絶があった。マカオでポルトガル流の文化環境のもとに生まれ育ったマカエンセにとって、ポルトガルは本来の意味において「故郷」とは呼べない。しかし、ポルトガルとの距離感や精神的・文化的な隔絶感が、マカエンセの心にかえってポルトガルに対する一種の精神的な望郷心・愛国心を伴う「ポルトガリダーデ」を植えた。その精神は「自分たちは中国人ではなく、マカオのポルトガル人である」という強いエスニック・アイデンティティとなり、それを絆とするマカエンセ・コミュニティが形成され、マカオという中国的な土壌に根づいたポルトガル文化を4世紀以上にわたり維持・継承してきたのである。

1999年12月20日の中国返還後50年間はマカオ従来の社会体制の継続が法によって明文化されている。しかし、返還後十年を待たずして、マカオ社会は急速に中国化の道を進み、同時にポルトガルの影響力は消失しつつある。中国返還という激動の転換期を経て、短期間で刻々と社会全体が変化していくマカオ社会の中で、マカエンセ・コミュニティのエスニシティにも何らかの大きな変容が起こっているのではないだろうか。さらにマカエンセというエスニック・マイノリティは今後もマカオ社会の中で生き残っていくことができるのだろうか。

そもそもマカエンセの定義が明確でないため、マカエンセの正確な人口を把握することは不可能に近いが、世界規模で2万人強と見積もられ、内訳としてはマカオ在住者（約8千人）よりもポルトガル・ブラジル・カナダ・アメリカ合衆国・オーストラリア・香港などマカオ以外の国や地域に居住するディアスポラのマカエンセのほうが多数であると考えられている<sup>(7)</sup>。このような現状をふまえ、マカエンセ・コミュニティの現況調査と将来に関するより明確な考察を行うためにはマカエンセの各居住地に長期間フィールドワークを実施することが理想的ではあるものの、筆者にとっては現実的に不可能であるため、まず研究対象をマカオ在住のマカエンセのみに絞ることとした。第一回目のフィールドワークとして、2008年3月15日～31日にかけて15日間マカオに滞在し、16名のマカエンセにインタビュー（聞き取り調査）を実施した。

本録は、①同期間中に実施したインタビュー全記録、②2008年6月に日本で実施した日本在住マカエンセ1名のインタビュー記録のほか、③マカオ在住マカエンセからの電

(7) マカオ特別行政区統計局2006年度センサスならびに Costa, Francisco Lima da: *Fronteiras da Identidade: Macaenses em Portugal e em Macau*. Lisbon: Fim de Século - Edições, Sociedade Unipessoal, Lda (2005) 参照。

子メールによる「マカエンセのアイデンティティ」に関する参考意見、④ディアスポラ（ポルトガル在住）のマカエンセからのメールによる「マカエンセのアイデンティティ」に関する参考意見（ケース20）計20件を記載したものである。

## 2. インタビュー内容・形式

聞き取り調査にあたり、事前に下記の質問を準備した。

1. あなたにとって、マカエンセとは誰のことを指しますか？
2. あなたのマカエンセとしてのアイデンティティの中に、「ポルトガリダーデ」（ポルトガル語：portugalidade, ポルトガルの精神性や価値観、ポルトガルとのつながり）を感じますか？
3. 返還後8年が経過した今（2008年3月時点）、返還前と比較して、マカエンセの生活とアイデンティティ<sup>(8)</sup>に何か変化があったと思いますか？ また、あなた自身はどうでしたか？
4. マカエンセとそのアイデンティティ<sup>(9)</sup>の未来はどうなると思いますか？

各インフォーマントの個人的記述に関しては、プライバシー尊重のため、冒頭に氏名のアルファベット・性別・年代のみを記し、なるべく固有名詞の記載は避けるよう努力したが、内容的にインフォーマントが所属する組織名などを明示する必要性が生じた場合はそのまま記載した。また、マカオにおけるインフォーマントの知名度を示す大まかな指標として便宜的に「著名人」もしくは「一般人」に二分した。

### 1) マカオにおけるインタビュー記録（ケース1～ケース16）

実施期間：2008年3月15日～31日

実施場所：マカオ（マカオ半島16名、タイパ島1名）

インタビュー人数：16名

- ・年代別：20代2名、30代1名、40代4名、50代4名、60代5名
- ・性別：男性14名、女性2名
- ・マカオにおける知名度：著名人8名、一般人8名
- ・使用言語：ポルトガル語（15名）・英語（1名）

---

(8) 「エスニシティ」が適切な表現であるが、実際のインタビューでは「アイデンティティ」を用いたため、このまま記載する。

(9) 同上。

## 2) ディアスポラ (日本在住) のマカエンセへのインタビュー (ケース17)

実施期間: 2008年 6 月

実施場所: 東京都内カフェテリア

使用言語: 日本語

年代・性別・その他の分類: 60代前半 (推定)・男性・一般人

## 3) マカオ在住マカエンセからの電子メールによる「マカエンセのアイデンティティ」に関する参考意見 (ケース18・19)

ポルトガル大使館に勤務する筆者の夫と、マカオのインフォーマントを通じて紹介されたマカオ在住のマカエンセから電子メールにより入手したもの。

実施期間: 2008年 3 月 (ケース17)・2008年 7 月 (ケース18)

実施場所: メール形式のため省略

インタビュー人数: 2 名

・年代別: 40代 1 名, 年齢不明 1 名

・性別: 女性 2 名

・その他の分類: 一般人 2 名

・使用言語: ポルトガル語 (2 名)

## 4) ディアスポラ (ポルトガル在住) のマカエンセからのメールによる「マカエンセのアイデンティティ」に関する参考意見 (ケース20)

実施期間: 2008年 7 月

実施場所: メールによる回答のため省略

使用言語: ポルトガル語

年代・性別・その他の分類: 50代前半 (推定)・男性・一般人

インフォーマントにリラックスして自由に語ってもらうことを重視したため、すべての質問をすることが不可能であったケース、質問に対して直接の回答が返ってこなかったケースも生じた。インタビューによって質問の順番は適宜変更したが、ここでは上記の質問順に記載した。インフォーマントの発言の中には事実の成否を確認すべき箇所もみられたが、本録では全文を記載することとする。インタビューで語られている事実関係や年齢などは、すべて2008年 3 月当時のことである。

なお、紙面の都合上、本号では「著名人」8名へのインタビュー (ケース1～8) 内容を記載し、「一般人」8名へのインタビューならびにメールで入手した参考意見 (ケース9～20) 内容は次号に掲載する。



### 〈ケース1〉M・F (男性・40代後半・著名人)

マカエンセとしての基本は、第一にマカオとの関わりがあるということ、そして第二に「ポルトガリダーデ」、すなわちポルトガルの「文化的価値判断」を自分の中に持っていることだ。返還後も、マカエンセとしてのアイデンティティは変わっていない。未来はわからないが、マカエンセには必ずマカオ社会に居場所があるだろう。

2008年3月26日午後、マカオ半島中心部のオフィスで約45分間のインタビューを実施した。マカエンセ協会 (Associação dos Macaenses de Macau, 土生葡人協会) 現会長。

1961年生まれ (インタビュー当時46歳)。本業は弁護士だが、すでに「死語」となっているマカエンセのことは、パトゥア語<sup>10)</sup>の復興を目指し、劇作家・演出家としてパトゥア語演劇を主宰している。マカエンセ・ファミリーとして有名な一族の出身である。作家・弁護士である父もマカエンセの第一人者として広く認知されている (残念ながら時間の関係で父親にはインタビューすることは叶わなかった)。中国返還 (1999年) やユネスコ世界遺産登録 (2005年) 当時、日本でも多くのマカオ関連のテレビ番組が制作・放送されたが、その際に、パトゥア語の復興をめざすマカエンセの若きリーダーという形で必ずと言ってよいほど紹介された人物である。筆者は1999年4月に某テレビ番組制作チームの通訳としてマカオに渡った際、パトゥア語演劇の取材とM・F氏のインタビューを行なった経験がある。

顔立ちは完全な中国系。完璧なポルトガル語を話し、中国語・英語も同様に堪能なようだ。あまりにも有名なマカエンセのため、逆に個人的なライフヒストリーに関しては語ってもらうことができなかった。資料によれば、父親はマカエンセ、母親は香港生まれの中国人。リスボンのカトリック大学法学部卒。家族構成は妻と二人の子ども。妻子ともにポルトガル名であるがマカエンセであるかどうかは不明である。

語り口は非常にエネルギッシュで早口。同じようなインタビューを何度となく受けているはずだが、さわやかで明確な印象がその「慣れ」を感じさせない。

---

(10) ポルトガル語の表記はPatuá, Patoá, Patoisなど複数。ポルトガル語を土台として多様な言語の語彙と体系を持つクレオール語として、マカエンセと一部のマカオ在住の中国人を中心としたコミュニティ間の話し言葉として受け継がれてきた。しかし、19世紀後半からポルトガル語教育が一般化することによって次第に話されなくなり、20世紀初頭以降はほとんど耳にすることはなくなっている。

## Q 1. あなたにとって、マカエンセとは誰のことを指しますか？

マカエンセは誰のことを指すのか、それを定義することは非常に難しく、誰もが納得できる定義を見つけることはできないだろう。それは各個人のアイデンティティと深くかかわるからだ。たとえばポルトガル人とは誰か、日本人とは誰か、そして中国人とは誰かと言うのと同じ問題だ。「マカエンセとは誰か」、あまりにもシンプルな質問でありながら、それに対する答えは非常に難しい。時代とともにその定義が変化していくからだ。マカエンセの定義は彼らをめぐる新しい状況や環境に対応して変化していく。

自分個人にとって、マカエンセとして基本となるのは次の二点である。第一点目は、「マカオとの関わり」があるということ。マカオ生まれであることは、(もはや) マカエンセの定義として絶対条件にはならない。現代では、両親がマカエンセであっても、子どもはマカオ生まれでないというケースが多々ある。この場合でも、両親がマカオに対して深いつながりと愛着を持っていれば、マカオ生まれでなくてもその子どもたちはマカエンセである。

たとえばこんなケースもある。ディアスポラとしてマカオから米国に移住して50年もたち、完全に現地化し、一度もマカオに戻ることもなくとも、マカオへの愛着を持ち続けている者がいる。彼らもまたマカエンセである。彼ら(の子孫)はファーストネームをすでにその国の名前に代えていても、ファミリーネームは(マカエンセの伝統である)ポルトガル名のまま維持している。

ちなみに、「マカオに生まれた人」すべてを「マカエンセ」と呼ぶ人もいる。それでは、マカオに生まれた中国人はどうなるか。我々は自分たちマカエンセを“Filhos da terra”(かの土地の子どもたち)と呼ぶ。それにあたる中国語は「トウサン(土生)」だが、マカオ生まれの中国人は自らを「トウサン」とは呼ばない。「トウサン」はマカオ生まれのポルトガル人のことであって、彼らは自分たちを「中国人」とであると言う。

さらに別のケースもある。たとえば中国人であるが、マカオに生まれポルトガル式の教育を受け、カトリック教徒でありマカオに対する深い愛着がある人物は、我々マカエンセのひとりだ。また、ポルトガルに生まれたポルトガル人であっても、マカオに長く暮らし、マカオを愛する人物もやはり我々の仲間だ。

第二点目は「ポルトガリダーデ」を持っているということ。「ポルトガリダーデ」は国籍とは異なる。かつてマカエンセは自動的にポルトガル国籍を取得したが、現在はそうではなくなっている<sup>(11)</sup>。「ポルトガリダーデ」とはポルトガルの「文化的価値判断」を自分の中に持っていること。しかし、それはたとえば、あるマカエンセがポルトガル

(11) 1981年11月21日に施行された現国籍法により、同日までにマカオで生まれた者は全員「ポルトガル人」とみなされるが、翌日以降に出生した者には「ポルトガル人の父か母から生まれた者」に限ってポルトガル国籍が認められることになった。



を訪れたとき、「まるで故郷にいるように感じる」というたぐいのことではない。むしろ、イタリア人やイギリス人がポルトガルを訪れ、そこを外国だと感じるのとおなじ感情をマカエンセも持つだろう。つまり、別のとらえかたでの「ポルトガル人」なのだ。「ポルトガリダーデ」、もしくは“lusitanidade”（筆者注：ルジタニダーデ。ルジタニアはポルトガルの古名）という考え方は、人生、生き方の根幹となる価値観としてマカエンセが持つ文化的なかかわりなのだ。我々はひとりひとりが固有のアイデンティティと価値観を所有しているが、そのバックグラウンドは「ポルトガリダーデ」とポルトガル世界に発している。この二点が最も大切だろう。

大切なのはマカオに対する深い愛着心と、我々マカエンセ（のコミュニティ）に認められることだ。では、マカオに対する深い愛着があれば、誰でもマカエンセなのか。たとえば日本人やイギリス人が、長くマカオに暮らし、マカオを愛していたらどうか。やはり彼らはマカエンセではなく、日本人であり、イギリス人だろう。それは前述のマカエンセの条件としての第二点目、「ポルトガリダーデ」につながる文化的なかかわりを持つか、持たないかという差だろう。

Q 2. マカエンセの家系の若い世代の中には、ポルトガル語ではなく英語や中国語で教育をうけ、ポルトガル語が話せない若者たちも多数いると聞きますが、彼らもマカエンセであるといえますか？

デリケートな問題であるが、ポルトガル語の教育を受けないことでマカエンセでなくなるということにはならない。たとえばある日本人がある時期から別の国に行き、すべての教育をその国の言葉で受け、長い年月を経て日本に帰ってきたとき、彼はもう日本人ではないと言えるだろうか、否、やはり彼は日本人だろう。それは自分が受け継いできたものをすべて消し去ることは不可能だからだ。

グローバル化という言葉が世界を席卷し、人びとを隔てる壁がなくなった今、逆にアイデンティティの行方がわからなくなっている。若い世代の人たちはどんな言語で教育を受けようが、必ず年をとったときに、自分は誰なのか、どこから来たのかを自問自答するようになるだろう。彼らもまた、マカエンセであることには変わらない。

Q 3. 返還後 8 年が経過した今（2008 年 3 月時点）、返還前と比較して、マカエンセの生活とアイデンティティに何か変化があったと思いますか？

マカエンセとしてのアイデンティティは誰も変わっていない。生活は明らかに変わったといえるだろう。良い方向に変わったのか悪い方向に変わったのかはなんともいえない。

返還前、マカエンセは公務員社会で（ポルトガル人と中国人の）中間層に位置し活躍

していた。それは返還とともに終わった。今後どうすればいいか、どうやって自分たちを役立て、生き残ることが出来るのか考えるときがきたのだ。そこで道が開けた。もう一度、中間層の立場になることだ。中国はポルトガル語圏諸国との自然発生的な絆として歴史的な視点からマカオとマカエンセに注目した。自分たちが直接アンゴラなどのポルトガル語圏諸国に出向くのではなく、その自然発生的な絆を結ぶ場としてマカオを選んだ<sup>(12)</sup>。交渉の場として他の都市でなくマカオを選んだのは、マカオの歴史的背景と成り立ちがルゾフォニア（ポルトガル語圏）だからだ。おそらくマカエンセが力を発揮する新しい場所ができるのではないだろうか。マカエンセにとって、たとえばポルトガル語だけでなく中国語も話せなくてはいけないなど、返還前よりも苦勞したりすることは確かにあるかもしれないが、そこまでラディカルな変化があったとは思わない。ある程度の変化はすでに予測されていたことだった。その点で、マカエンセにとって、返還はうまく進んだと思う。

#### Q 4. あなた自身はどうでしたか？

私自身は返還前より良くなった。前よりも裕福になったと言う意味ではない（笑）。

それは、私が行なっている（パトゥア語の）演劇活動を、返還前よりずっと認知してもらえるようになったから。「中国のマカオ」になってから、政府はマカオ文化に対し非常に重きを置いてくれるようになった。取り組んでいることをしっかりと認めてもらえること、それは何よりも嬉しいことだ。ポルトガル時代に何も支援してもらえなかったということではもちろんないが、あれだけ長くマカオにいながら、ポルトガルにはマカオ文化を保存するための温かい配慮というものがあまり見られなかった。活動が困難な時期もあったが、その意味で返還後、中国政府はパトゥア語劇活動を非常に温かく見守ってくれている。何でも好きなことをさせてくれるというのではもちろんないが、決まった制限の中で、応援をしてくれている。私個人の経験としては、返還によってマカエンセが大きな変化を受けたとは思わない。

#### Q 5. あなたはマカエンセの中でも特にマカオ文化の保存のために尽くしている方ですが、最近の活動を教えてください。

2～3年前からパトゥア語のワークショップ開催を計画している。（現在、実際には

(12) ケース5で紹介する中国・ポルトガル語圏諸国経済通商協力フォーラム（ポルトガル語：Fórum para a Cooperação Económica e Comercial entre a China e os Países de língua portuguesa）のことを指すと考えられる。

とんど耳にすることはなく）パトゥア語を、どこか別の世界の言葉、舞台の上だけの言葉というのではなく、もっと生活に密着した言葉として人びとに認識してもらいたい。もう一度日常言語にするためのわけではもちろんないが、人びとにパトゥア語にもっと興味を持ってほしい。マカエンセのコミュニティだけに限るのでは意味がないので、マカオ全体の文化遺産としたい。パトゥア語の学習にはポルトガル語の最低限の知識が必要であるため、实际的に難しい面もある。しかし、もしパトゥア語をひとつの言語としてとらえれば、テクニクさえ学べばポルトガル語ができない中国人や外国人に学んでもらうことができる。今の段階ではそこまでの野望はなく、ワークショップでパトゥア語の全体的な歴史的背景や基礎文法を紹介し、文章の翻訳・解説を行なう予定だ。また、本年（2008年）5月に講演会と演劇の公演を実施する予定である。

#### Q 6. マカエンセとそのアイデンティティの未来はどうなると思いますか？

いい質問だね。未来はわからないが、マカエンセには必ずマカオ社会に居場所があるだろう。当然のことながら、小さいマカオに住むマカエンセは、大きい中国の政治体制に合わせて形を変え生き残ってきた。中国政府は数ある都市の中で、ポルトガル語圏諸国との交渉の架け橋としてマカオを特別視している。その舞台でマカエンセは重要な役割を担うことができると私は思う。そこで活躍できるのがマカオの総人口のほんの数パーセントしかないマカエンセである。中国に属しながら中国人のコミュニティではない、少数派であるマカエンセがマカオそのものの特色となっているのだ。中国政府が現在の政治体制を続ける限り、マカエンセの将来は明るいと言えるだろう。

ただ、これから20年、30年、40年と年月を重ねていき、マカエンセが生き残っているかどうか、それは未知の世界だ。

\*\*\*\*\*

#### 〈ケース 2〉 A・C（男性・50代後半・著名人）

マカエンセは、多様な文化のもとに形成された独特の「ポルトガル人としてのアイデンティ」を持っている。マカエンセはつねに社会に「生き残る」ために必要に応じて方向転換してこなければならなかった。中国がマカエンセたちを今後どのように活用し、どのような場で役立てていくつもりなのか、未来はすべて中国の出方にかかっている。

2008年3月25日、マカオ半島中心部にある自宅でインタビューを実施。

1951年マカオ生まれ（インタビュー当時57歳）。返還1年前の1998年までマカオ政庁

(市役所にあたる)文化担当官として公職にあった。現在はフリーランスのアートディレクター、デザイナーとして個人事務所を自宅に構える。ヨーロッパ、アジアの両方の血を引く風貌を持つが、マカオではマカエンセでなくポルトガル人と思われることが多いようだ。

父はポルトガル出身で、すでに6代にわたってマカオに在住していた祖父とアイルランド系マカエンセの祖母のもとに生まれた。母はポルトガル人の祖父と、ゴア(インド)人と中国人の血を引く祖母の間に生まれたマカエンセ。また、母はマカオで最初の女性作家・ジャーナリストとして活躍したヨーロッパ・アジア系「混血」(ユーラシアン)女性だったが、子宮がんのため43才で他界。自分は母親の再婚相手との間にできた子どもで、異母兄弟がふたりいる。母親が亡くなったとき、自分はわずか6歳だったため、はっきりした母の思い出はほとんどない。母の代わりに育ててくれた叔母や、周囲の人々からさまざまな母親のエピソードを聞いて育った。

つねにポルトガル語の環境のもとに教育を受け、マカオ高等学校(リセウ)卒業後、ポルトガル・リスボン美術大学に進学・卒業。とはいえ、幼いころマカエンセの乳母といる時間が長かったため、彼女から広東語の会話を習い、読み書きはできないが会話は普通にできる。1978年よりマカオ政庁文化政策部門における文化担当官として、数々のマカオの公的文化活動に尽力してきた。このインフォーマントがある文化プロジェクトのために返還1年前に当時の市長と非公式に日本を訪問した際、筆者が同行通訳を務め、個人的に親しくなった経緯がある。

現在の家族構成はポルトガル人の妻、娘(30代前半・弁護士・マカオ在住)、息子(20代前半・大学院生・ポルトガル在住)の四人家族。息子は大学院を今年(2008年)卒業する。最終的に娘同様、マカオに戻ってきてほしいとは思うが、どうなるかわからない。

---

#### Q 1. あなたにとって、マカエンセとは誰のことを指しますか？

「マカエンセとは誰か」、それを知るにはさまざまな視点から考察することが大切だ。それはひとりひとりのマカエンセが異なった出自を持ち、異なった歴史を持っているからだ。ポルトガル人は大航海時代、アフリカからゴア、マラッカを経てマカオに到着したが、それぞれの通過地点で(現地女性との)交婚を行った。マカオではインド人・マレー人の他、中国人とも交婚した。江戸時代日本で発令された禁教令によってマカオに逃れてきた日本人女性を祖先に持つマカエンセもいる。つまり、マカエンセは、ひとつの籠に入っているさまざまな種類のフルーツのようなものだ。

マカエンセはつねにポルトガル人としてのアイデンティティを持っている。しかし、それはポルトガル本国のポルトガル人が持つモノカルチュラルなアイデンティティとは

異なる。さまざまな文化のもとに形成されたマカエンセ独特のマルチカルチュラルなアイデンティティである。卑近な例として、マカオで生まれ育った私の息子は、幼いときにライオンの鳴き声を真似するとき、中国舞踊に出てくる「ライオンを表す音」で鳴いてみせた。もしポルトガルに生まれ育っていたら、このようなことはなかっただろう。

Q 2. 返還後8年が経過した今（2008年3月時点）、返還前と比較して、マカエンセの生活とアイデンティティに何か変化があったと思いますか？ また、あなた自身はどうでしたか？

恐竜が生きていた時代から、ワニが形を変えて今もなお生き延びているように、マカエンセはつねに社会に「生き残る」ために自分を変えてきた。言い換えれば、生き残るために、必要に応じて方向転換してこなければならなかった。それは必ずしも「より良い方向に向かって発展した」ということとは一致しない。

マカエンセはつねに（支配階級であるポルトガル人と被支配階級である中国系マカオ住民の間の）「中間層」として生きてきた。1910年代、マカエンセは法律上「第二級ポルトガル人」であったが、ポルトガル人としてのアイデンティティを持ち、ポルトガル本国のポルトガル人からも同胞と思って欲しいと願っていた。（マカエンセであり、ジャーナリスト・作家であった）私の母は、「私の祖国、ポルトガル」と著書に記していた。それに反して、ポルトガルではマカオに対する認識も、マカエンセに対する同胞意識もまったくなかったのだが。

1966年の文化大革命はマカエンセの生活とアイデンティティに大きな影響を及ぼした。将来への不安から、多くの裕福なマカエンセはポルトガルをはじめとする海外に脱出（移住）したが、マカオに残留するしかない一般のマカエンセは生き残るために「強い方向への方向転換」、すなわち中国とのつながりを強めるために中国人との婚姻関係を積極的に結ぶようになった。こうして生まれた子どもたちのうち、中国人を母親にもつ場合は中国語を母語とするケースが増え、若い世代から少しずつ「ポルトガル人」としてのマカエンセのアイデンティティが失われていった。たとえば私の兄弟のひとり、中国人女性と結婚し、生活は中国式となった。二人から生まれた姪も中国人と結婚し、彼らの子ども達の代にいたってはまったくポルトガル語を話せない。

1999年の返還は、マカオ社会においてポルトガル人としてのアイデンティティを誇っていたマカエンセがその「特権」を失った瞬間であった。そしてマカエンセのコミュニティは、30年前に文化大革命が起こったときと同じ状況に立ち、マカエンセの「中国人化」が進められている。

私自身は、98年に公職から退いたが、そのきっかけは、返還を前にして（ポルトガル人に代わり）中国人が少しずつ公務員のトップにつくようになっていき、自分の部下

だった中国人が上司になったことだった。もし返還がなかったら、今でも公務員のまま  
でいたのかもしれない。その意味で自分にとって社会的な立場において変化はあったが、  
つねに「ポルトガル人である」というマカエンセとしてのアイデンティティには変化は  
ない。自分の息子も娘もまた、マカエンセではあるが、妻がポルトガル人ということも  
あり、ポルトガル人としての西洋的なアイデンティティを持っている。

### Q 3. マカエンセとそのアイデンティティの未来はどうなると思いますか？

マカエンセの未来はどうなるか。それは、中国の出方しだいによるだろう。マカエン  
セたちはこれまでずっと、生きていくために社会の「仲介役」としての立場を守ってき  
た。中国がこうしたマカエンセたちを、今後どのように活用し、どのような場で役立て  
ていくつもりなのか、すべては中国の出方にかかっている。

その他のコメント：

近年、すでに「死んだ言葉」であるパトゥア語<sup>(13)</sup>を見なおそうという動きがあるが、  
実際、新しい世代の若者たちが話している言葉はポルトガル語・英語・中国語が混じっ  
た一種のパトゥア語と言えると思う。

\*\*\*\*\*

### 〈ケース 3〉F・M（男性・50代後半・著名人）

マカエンセとは、マカオに生まれ、ポルトガル式の教育を受けた者を指す。  
ポルトガル人の血を引くことはマカエンセの絶対条件ではない。返還以前と  
以後でマカエンセのアイデンティティは確かに変わった。しかし、コミュニ  
ティが続く限り、マカエンセは社会と現実とうまく適応し、形を変えながら  
自らのアイデンティティを維持していくだろう。

2008年3月18日、マカオ半島の中心地からバスで10分ほどの場所にあるオフィスでイ  
ンタビューを実施。1時間半にわたって話をしてくれた。

1949年マカオ生まれ（インタビュー当時58歳）。後日資料により年齢が判明したが、す  
でにリタイアしているからか、見た目には60代後半に思われた。有名なマカエンセ・  
ファミリーのひとりであり、現在はマカオの退職者および年金生活者のための協会（ポ  
ルトガル語：APOMAC - Associação dos Aposentados, Reformados e Pensionistas de

(13) 注10参照。



Macau, 中国語：澳門退休、退役及領取撫恤金人士協會）会長。オフィスは二階建てで、一階部分は仕事をリタイアした年金生活者のための食堂や娯楽施設が設置されている。

入口に飾られている写真ではアジア系のおもかげが目立って見えたが、実際に会うと、どちらかというポルトガル系が目立つ端正な顔立ち。育ちのよさが伺われるような落ち着いた物腰。マカオで生まれ育ち、教育もマカオで受けた。他の組織のトップのようにポルトガルで高等教育を受けた経験はなく、最終学歴は中卒。ポルトガル人のポルトガル語とは異なるいわゆるマカエンセ独特の発音とゆっくりした話し方は、外国人にとっては非常にわかりやすいポルトガル語だった。

---

Q 1. あなたにとって、マカエンセとは誰のことを指しますか？

私にとって「マカエンセ」とは、まずマカオに生まれ、そしてポルトガル式の教育を受けた者を指す。つまり、ポルトガル人の血を引くことはマカエンセの絶対条件ではない。マカエンセはポルトガル人もしくはマカエンセ同士の間でしか結婚しないという時代は終わった。マカオに在住するマカエンセたちと中国人との婚姻もどんどん増えているし、海外に（ディアスポラとして）出ていったマカエンセがそれ以外の国籍の人間と結婚するケースも多々ある。

Q 2. あなたのマカエンセとしてのアイデンティティの中に、「ポルトガリダーデ」（ポルトガル語：portugalidade, ポルトガルの精神性や価値観、ポルトガルとのつながり）を感じますか？

私にとってポルトガルは「祖国」である。ポルトガル国籍を持っていること、つまり「ポルトガル人であることに誇りはある。しかし、自分の根付く場所はあくまでマカオである。もしそうでなければ、もっと頻繁にポルトガルに行こうとするだろう。

Q 3. 返還後 8 年が経過した今（2008 年 3 月時点）、返還前と比較して、マカエンセの生活とアイデンティティに何か変化があったと思いますか？ また、あなた自身はどうでしたか？

返還以前と以後でマカエンセのアイデンティティは確かに変わった。変わらざるを得なかったと言う言葉が正しいだろう。ポルトガルはマカオの財源のおかげで早期に EC に加盟できたにもかかわらず、マカオに対して特別な措置をとってくれなかった。99 年 12 月 20 日の返還が公表された 90 年以降、ポルトガル政府はポルトガル国籍を持つマカ

エンセ公務員の退職後の社会保障（年金）に関して明言しなかった。そのため、自分は今一名の同僚とともにポルトガル政府に対して大規模な抗議活動をおこない、その結果幸運なことにマカエンセ退職者の年金については認めさせることができた。

ポルトガル統治時代、公務員のトップの座はほとんどポルトガル人で占められていたが、彼らは中国語が使えないため、両言語を駆使できるマカエンセが中間層の地位にあった。ポルトガル人は自分達が去った後のトップの立場をマカエンセに託そうともせず、また90年代以降少しずつ上層層に加わってきた中国人に引継ぎをする姿勢もとろうとしなかった。返還後のマカエンセ公務員のポストに関しても一切保証をしなかったため、この点についてもポルトガル政府に働きかけをしたが、残念ながら明確な保証は得られなかった。

そのため、将来を危惧した多くのマカエンセが早期退職をして国外に出て行き、引き続き中間層として働かざるを得ないマカエンセの公務員たちは、上層部がポルトガル人から中国人に変わる＝公用語が中国語になる（筆者注：法律上はポルトガル語も引き続き公用語）ことによって、いわゆる生活言語である広東語のほかに（自分を含めて、広東語は話せるが、読み書きはできないというマカエンセが多かった）、北京語、さらに近年のめざましい諸外国の投資家らとの折衝のためには英語の会話・読み書きにも精通しなくてはならなくなった。しかし、それには時間がかかり、こうしたポルトガル政府の引継ぎのまずさが、返還後数年間にわたって行政上の混乱を招いた。

しかし、返還後のマカオ社会に危惧されていたほどの混乱はなかった。ポルトガル政府から返還後の生活を保証されなかったため、マカオに残ることを決めたマカエンセたちの多くが返還前にポルトガルに物件を購入し「非常事態」に備えたが、結局は移住することもなくそのままマカオで安定した生活を続けている。前もってポルトガルに移住したものの、この安定した状況を見て再びマカオに戻ってくるマカエンセもいる。

「マカエンセのアイデンティティは変わらざるを得なかった」と言ったのはすなわち、マカエンセは自らが新しい社会体制のトップには立てないことを既に知っており、また中国政府は「一滴でも中国人の血が入っているものはすべて中国人である」とみなすため、それまでの「マカエンセはマカオのポルトガル人である」というメンタリティを捨ててこうした変化に順応していく必要に迫られた、ということである。

#### Q 4. マカエンセとそのアイデンティティの未来はどうなると思いますか？

マカエンセとは、「人種」ではなく「コミュニティ」である。よって、マカエンセにとってアイデンティティの変容が必要であっても、それが彼らのアイデンティティそのものの消滅につながるとは思わない。前述のように、マカエンセがポルトガル人もしくはマカエンセ同士の間でしか結婚しないという時代は終わり、中国人やそれ以外の国籍の人間と結婚するケースも増えてきている。いつかはポルトガル人の血がまったく入ら

ないマカエンセの時代が来るかもしれないが、それはずっと先のことであろうし、マカエンセとしてのコミュニティが続く限り、あまり心配することはないと思っている。マカエンセは、自分の所属する社会とその現実とうまく適応し、形を変えながら自らのアイデンティティを維持し続けていくだろう。

Q 5. 「ポルトガル・マカオ」から「中国・マカオ」になったことによって、マカエンセがそのアイデンティティを失い、消えていく危険性に直面しているのではないのでしょうか？

自分はそうは思わない。逆に、中国はマカオ、そしてマカエンセに対して非常にフレキシブルな、好意的態度を示していると思う。その証拠に、三年に一度、海外に多く出て行った（ディアスポラの）マカエンセたちを集め、その中で伝統的なマカオ料理や、パトゥア語の演劇などを若い世代のマカエンセに紹介し、マカエンセのコミュニティの結束を維持する活動を全面的に支援しているのはほかならぬ中国政府である。

パトゥア語<sup>(14)</sup>に関しては、現在、マカオで聞くことはない。自分の祖父母の時代には会話として耳にすることはあり、自分もひとつふたつは知っているが、すでに自分の時代から、パトゥア語を大事に守っていこうという気持ちはまったくなかった。現在、M・F氏を中心にパトゥア語を守っていこうという活動が行なわれていることは非常に良いと思うが、すでに使われていない（＝死語）言葉をただ「こういう言葉です」と説明するだけではそこに大きな意義は感じない。

\*\*\*\*\*

#### 〈ケース 4〉P・C（男性・推定40代後半・著名人）

返還後、ポルトガル人がいなくなったマカオでは、マカエンセたちは中国人と結婚し、ポルトガルのものは着実に薄れてきている。今日では、マカオを愛し、マカオを自分の居場所として定住している人たちが基本的にマカエンセといえるだろう。マカエンセが今後どうなるかは、すべて中国政府の政策にかかっている。

2008年3月24日午後、マカオ半島中心部にあるオフィスでインタビューを実施。

40代半ば（推定）。マカオ立法議会議員を現在まで二期務め、マカオ公務員協会（ポルトガル語：Associação dos Trabalhadores da Função Pública de Macau, 中国語：澳門公

(14) 注10参照。

職人員協會) 理事会会長などの要職にもある若手の政治家。いかにも若手の議員といったスマートな印象。

両親はポルトガル人、自分はマカオ生まれ・マカオ育ち、マカオ在住のマカエンセ。政治家という職業柄か、個人的なプロフィールに関してはほとんど語ってくれなかった。

---

Q 1. あなたにとって、マカエンセとは誰のことを指しますか？

狭い意味では、ポルトガル人と中国人両方の血を受け継ぐ人のことをいうが、マカオを愛し、マカオを自分の居場所として定住している人たちが基本的にマカエンセといえるだろう。マカエンセの中でも、マカオ生まれでポルトガル人と中国人の両方の血を引く者、ポルトガル人のみの血を引く者、ポルトガル生まれのポルトガル人であっても50~60年にもわたって長い年月を帰国せずにここマカオで過ごしている者もいる。また、非ポルトガル系(中国系)でもポルトガルの教育を受け、料理や生活様式がポルトガル式であるマカオ生まれの住民もマカエンセである。

Q 2. ポルトガル系であっても英語、もしくは中国語の教育を受けて育ち、ポルトガル語ができない今の若い世代たちもまたマカエンセと呼べるでしょうか？

それはいい質問だ。マカエンセの定義を広げて、そういう人たちもマカエンセとして考えなければ、将来はマカエンセと呼べる人がいなくなってしまうので、何世代にもわたってここマカオを住む場所とする人たちはすべてマカエンセと呼ぶべきだろう。

Q 3. あなたのマカエンセとしてのアイデンティティの中に、「ポルトガリダーデ」(ポルトガル語: *portugalidade*, ポルトガルの精神性や価値観, ポルトガルとのつながり)を感じますか？

ポルトガルの意識の中に、中国の文化が包まれているという感じだ。自分自身は、ポルトガルにいても中国にいてもどちらも変わらない。

私自身はといえば、国籍はポルトガルではあるが中国の影響を強く受けている。国籍、受けた教育、料理はポルトガルのものだが、中国的な要素も自分の中には非常に多い。ポルトガル7対中国3ぐらいだろうか。

Q 4. 返還後8年が経過した今(2008年3月時点)、返還前と比較して、マカエンセの生活とアイデンティティに何か変化があったと思いますか？ また、あなた自身はどう

でしたか？

確かに中国返還は、マカエンセに大きなインパクトを与えた。ポルトガルはマカオとのコネクションを切り、マカオから西洋的、つまりポルトガルのなものは消えつつある。返還前、450年間のポルトガル統治時代を通して、ポルトガル人はマカオに定住するつもりはなく、つねに総督の任期である4年間という期間を重ねてきたにすぎなかった。返還後、マカオでは中国語が第一言語となり、ポルトガルは地理的な距離もあってどんどん遠い存在になってしまった。ポルトガル人がいなくなったマカオでは、マカエンセたちは中国人と結婚し、ポルトガルのなものは着実に薄れてきている。現在のマラッカのように、ポルトガルのな人名のみが現地住民に残るだけになってしまうかもしれない。今後どうなるかは、すべて中国政府の政策にかかっている。

とはいえ、現在の中国政府は、マカオのポルトガル文化を継続するためにさまざまな組織を通して力を注いでいる。たとえば中国・ポルトガル語圏諸国経済通商協力フォーラム<sup>(15)</sup>の事務所はここマカオに置かれている。また、東洋ポルトガル・インスティテュート<sup>(16)</sup>などを通して、中国人のポルトガル語教育に対しても助成をおこない、ポルトガル語と文化を残そうとしている。

しかし、一般的に、中国語を完璧に修得していないマカエンセにとって、公務員として働くことは非常に難しくなった。返還後はほとんど誰も公務員のポストを獲得できなくなっている。そのため、大多数が民間企業、特にカジノに就職している。ポルトガル語学校の中国語教育は充分ではないので、卒業後、マカオで公務員になることができず、海外に行くしか道がない。その点は、ポルトガル文部省が対処しなくてはならない。

返還後、中国人同士の結婚が多くなっている今、ポルトガル人としてのアイデンティティは必然的に薄まってきている。さらに、ポルトガル人の医師、裁判官、教師の雇用に障害が出てきている。法律は現在もなおポルトガル法に準じているのに、こういう状況だ。(2009年以降の)新政府<sup>(17)</sup>がそれを変えてくれることを祈っている。

(15) ケース5参照。

(16) ポルトガル語：IPOR-Instituto Português do Oriente, 中国語：東方葡萄牙學會。社会人に対するポルトガル語講座を開設している教育機関のうちもっとも積極的な活動をおこなっている。ポルトガルを本部におく二つの文化団体、カモンイス・インスティテュート（ポルトガル語：Instituto Camões）とオリエント財団（ポルトガル語：Fundação Oriente, 中国語：東方基金會）を母体とする。いずれも世界諸地域（オリエント財団は東洋に限定）におけるポルトガル語とポルトガル文化の普及を目的として活動している。

(17) 2008年当時行政長官であったエドモンド・ホー（何厚鏞）の任期満了によって翌2009年に実施が決定されていた第三期マカオ行政長官選挙とそれにとりなう新政府（立法会）のことを指す。

Q 5. 中国・ポルトガル語圏諸国経済通商協力フォーラムのような場所で、中国語とポルトガル語の両方の言語を駆使してマカエンセが活躍しているのではないのですか？

必ずしもそうとはいえない。確かに今のところ、中国人ではなくマカエンセがそうした場で働いているケースが多いが、こうした仕事に就けるものは10~20人程度であり、ごく少数にすぎない。

さらに多くのマカエンセ関連組織のトップが中国国籍を選択しているのは好ましくない傾向である。生き残るためには中国国籍にならなければいけないと一般の若者たちに思わせてしまうからだ。

Q 6. マカエンセとそのアイデンティティの未来はどうなと思いますか？

非常に明るいとはいえない。現在のマカオ経済はカジノに頼っているので、将来は不安定だ。先ほど述べたように、返還後、マカエンセが公務員になることは非常に難しくなった。たとえ能力、特にコンピュータ関連の才能や知識があっても、中国名がなくポルトガル名だけのマカエンセは雇用されないという差別がある。女性は男性に比べて雇用されないという差別も存在している。(2009年からの)新しい政府<sup>(18)</sup>が、こうした国籍・性別・見かけによる差別をしない政策をとるべきだと考える。

また、これからの新しい世代には、小さい時から中国語とポルトガル語両方をきちんと教えなくてはならない。前述のように現在唯一残っているポルトガル語学校は真剣に中国語を教えていないし、中国語学校のポルトガル語教育も不十分であり、ヨコの連携がない状態だ。両方の言語にプラスして、英語もしっかり修得すること、これがマカエンセのマカオ社会における「生き残る道」になる。

中国語ができない者は、いまのマカオ社会にはついてゆけない。ポルトガル語学校に対して、ポルトガル政府が現実を考慮し、小学一年生から(中国語を)必修科目にするように働きかけなくてはならないと思う。ポルトガル語ができない中国人がほとんどの社会の中で、中国語・英語・ポルトガル語を駆使することによってよりよい就職口を得ることができるのに、ポルトガル政府も、そして現在のマカオ政府もその点で目覚めていないのが事実だ。たとえばシンガポールのようなバイリンガルな方向性を持つべきだ。

\*\*\*\*\*

---

(18) 注17参照。



### 〈ケース5〉R・S (女性・40代後半・著名人)

マカエンセとは、まずマカオ生まれであること。そうでなければこの土地への深い愛着は生まれないから。そして、ポルトガルと中国の両方の文化を持ち、マカオを愛し、マカオに根を張っている人たちのこと。私たちのアイデンティティは我々ひとりひとりの持続性、活動、熱心な姿勢があってこそ生き残っていくし、それを守るためには、「マカオを深く愛する人間の集団」という特徴を持ち続ける必要がある。新しい世代がこの文化と伝統を継承してくれることを祈っている。

2008年3月24日午後、マカオ半島中心部にあるオフィスでインタビューを実施。〈ケース4〉のP・C氏のインタビュー後、突然インタビューをお願いしたのだが、慣れた様子で20分間ほど応じてくれた。

インタビュー当時48歳。中国・ポルトガル語圏諸国経済通商協力フォーラム (ポルトガル語: Fórum para a Cooperação Económica e Comercial entre a China e os Países de língua portuguesa) コーディネーターならびにマカオ公務員協会 (ポルトガル語: Associação dos Trabalhadores da Função Pública de Macau, 中国語: 澳門公職人員協會) 総会会長。顔立ちは完全な中国系。目の覚めるような紫色のスーツに、濃いメーキャップと巻き髪へのアスタイルで、かなりインパクトのある容姿。サバサバした語り口と時々みせる笑顔が、気鋭の政治家といった雰囲気を醸し出している。

突然のインタビューであったため、筆者が質問を投げかける前に自分からフォーラムの内容、マカエンセの将来について自由に語り、最後に質問にひとつふたつ答えると言う形になった。最後に「もう私、仕事に戻っていいかしら? やることが山積みなの」と言われながらも写真撮影をお願いすると、すばやくチェックして「綺麗に撮れていないわ」と撮り直しをさせられたのが非常に印象的だった。

---

(Q) 中国・ポルトガル語圏諸国経済通商協力フォーラムとは。

中国・ポルトガル語圏諸国経済通商協力フォーラム (Fórum para a Cooperação Económica e Comercial entre a China e os Países de língua portuguesa) は中国政府のイニシアティブにより設立された。2001年末に、当時のマカオ行政長官エドモンド・ホー (何厚鏞)<sup>90)</sup>がマカオを中国とポルトガル語圏諸国、全8カ国の架け橋として機能させる提案を立法議会に提出した。2002年、同案は中国の中央政府に提出後すぐに承認され、2003年以降、中国政府商務部を通じて各国の大使館との連絡を始めた。当時市役

所に勤務していた自分がこのフォーラムのエグゼクティブディレクターとして招聘され、以後、これら一連の会議や折衝の場に同席している。

同フォーラムの存在は、私たちマカエンセが中国と7カ国のポルトガル語圏諸国との間に立って友好的な経済協力関係に関する広いビジョンを持つことができるという意味で非常に重要だ。2004年からはマカオに事務局本部が常設され、自分のオフィスがマカオ特別行政区事務局として機能している。中国政府商務局とゴニアビサウ、カーボヴェルデ、モザンビーク、ポルトガルの各代表事務所はマカオに設置され、それ以外の国の事務所は各大使館の中にある。マカオが同フォーラムの基盤となっていることはこれらの国々によって認知されている。第一回フォーラムは2003年、第二回フォーラムは2006年に開催された。第三回フォーラムは2009年を予定している。これらの会議には各国の貿易、経済、産業の各面における首脳級のメンバーが顔を揃える。

こうした場において、マカエンセがどのような役目を果たすことができるだろうか？マカエンセは誕生したときから、二つの言葉、すなわちポルトガル語と広東語に通じているが、話すことはできても読み書きが出来ない人が多い。自分自身は広東語と中国語（北京語）を長年にわたって勉強し修得した。自分がポルトガル語と広東語、そして中国語（北京語）の三ヶ国語に通じていなかったら、いまのポジションにはいなかっただろう。会議ではポルトガル語、中国語双方の会話を理解し、書類を読むことができる。

60年代に生まれた私たちの世代、40代から50代の多くが、私のようにポルトガル語と中国語に通じているが、このフォーラムを我々の時代で終えることなく、次の世代に継承して行って欲しい。すなわち、今現在ポルトガル語学校に通っている若い世代たちがしっかりと中国語（北京語）を勉強し修得して、このフォーラムを引き継いでいてくれることを期待している。実際、2003年以降フォーラムが実施しているさまざまなイベントにポルトガル語学校の生徒たちが参加し、中国語を学ぶ必要性に目覚め、通訳・翻訳養成コースに通っている。マカオ社会に生き残るためには、我々マカエンセは中国語（北京語）をしっかりと修得する必要がある。中国のどの地方を見ても、中国語のほかにポルトガル語を公用語とし、ポルトガル語圏の国々との間の架け橋として機能していることを認識されているのはマカオしかない。マカオ基本法に記載されているように、司法・立法・行政面のすべてにおいて公用語とされているポルトガル語を使いこなせるマカエンセはみずからの「特権」を最大限に利用すべきだ。生活言語である広東語、そして北京語はある程度できても、ポルトガル語を修得するのは非常に難しい。もともとポルトガル語を母語とする環境にいるマカエンセたちが、現在のマカオ社会で生き延びるために、その立場をもっと有効に利用して努力を重ねれば、マカエンセの未来は明る

(19) 1999年12月20日の中国返還とともに行政長官に選出され、2004年に再選、2009年12月に十年間にわたる任期を終了した。現行政長官は崔世安（フェルナンド・チョイ）である。

いといえるだろう。

現在の中央政府の新しい戦略は、ポルトガル語圏諸国との貿易促進だ。つい今しがたもアンゴラや北京から、中国との貿易折衝の席での通訳（ポルトガル語・中国語）を探しているという電話を受け取った。賃金などの条件もかなり良い。言語に精通した人材が多く求められている今、マカエンセ・コミュニティの若い世代の人たちが「目を大きく見開き」、この点に目を向けて欲しい。それが私から若い世代への提言だ。

私たちのアイデンティティは我々ひとりひとりの持続性、活動、熱心な姿勢があってこそ生き残っていくと思う。今私たちはすでに新しい時代に立っている。もうポルトガルの時代、すなわちポルトガル語が優位にあった時代ではなく、中国語がそれに変わっている。

しかし、私たちは自分たちの過去を引き継いでいくことができる。「ポルトガル語を駆使する」という我々の持つ富と豊かさはひとつの重要な遺産だ。ユネスコ世界遺産に登録された建造物などの有形の遺産だけでなく、それらに命を与える人間的なファクターが必要だ。唯一我々ができることは、ポルトガルの血を引くコミュニティであるマカエンセのコミュニティを継続させ生き残らせることだ。そのひとつの活動として、私はポルトガル民俗舞踊グループの会長もしている。メンバーにはポルトガル人も中国人もいるが、一体となってこのポルトガル文化の保存に努めている。法律上でもマカオ基本法42条によって我々マカエンセの文化は守られている。マカオ政府、マカオ観光局、マカオ財団の支援を受け、1999年以降300回以上の公演を実施し、日本、韓国、フィリピン、台湾、アメリカ、シンガポール、中国（上海北京など）で我々の文化を紹介している。ポルトガルでの公演も予定されている。つまりマカオ政府は、この生きた伝統を残すことに積極的なのだ。こうしたマカオと中国政府の援助を得て、ポルトガル人の子孫であるマカエンセたちがどうして自らの文化を引き継いでいかないことがあるだろうか？

自分は大家族で、10人兄弟。甥、姪も19人、その子どもたちも5人いる。ポルトガル語はほぼ全員が完璧にできるが、自分はいつも「中国語、つまり広東語と北京語を勉強しなさい」と忠告しているので、多くの家族が勉強している。自分自身の24歳の息子も中国語を修得することの大切さを語っている。彼もマカオの人々、そしてマカオ政府に役立ち、自分たちのアイデンティティを持ち続けるためにも中国語（北京語）を勉強することを約束してくれている。

我々のアイデンティティを守るためには、「マカオを深く愛する人間の集団」という特徴を持ち続ける必要がある。私たちはみなマカオを愛し、マカオをふるさとと感じている。たとえば私はポルトガル国籍だが、ポルトガルに行けば外国人だと感じるし、中国のほかの都市に行ってもやはり同じように感じる。だから私はとてもマカオに対する想いが深い。ポルトガルと中国の文化が融合したこのマカオを私たちは愛している。新

しい世代がこの文化と伝統を続けていてくれることを祈っている。

私はフォーラムを誕生の時からずっと見守ってきた。フォーラムはまだ成長段階にあり、将来どうなるかはまだ未知数だが、私の子どもたちの世代がそれを引き継ぎ、より大きな機構に成長し、中国とポルトガル語圏との架け橋として活躍してくれることを祈っている。

Q 1. あなたにとって、マカエンセとは誰のことを指しますか？

まずマカオ生まれであること。マカオに生まれていなければこの土地への深い愛着は生まれないから。そして、ポルトガルと中国の両方の文化を持ち、マカオを愛し、マカオに根を張っている人たちのこと。私の家族は全員海外に出ず、ここマカオにいる。海外にいてマカオを想うのはいわゆる「理想郷」として想うだけ。マカオを愛し、自分たちの文化を守っていくためには、ただ精神的（プラトニック）であるだけではいけない。ここに住んで日々闘わなければならない。新しい未来のために、新しい世代の若者たちの就職、各機関、女性たちの社会での活躍を支援し、助けを必要とする人々のために自分は努力している。

Q 2. 最近の若い世代はポルトガル語の教育を受けず中国語や英語で教育を受けている人もいるが、彼らもマカエンセと呼べるでしょうか？

もちろん。彼らも家庭ではポルトガル文化の環境のもとにあり、マカオを愛しているのだから。実際私の姪のひとりも中国語学校に通ってポルトガル語は話せないけれど、親戚一同が集まる環境でポルトガル文化を感じている。

\*\*\*\*\*

### 〈ケース 6〉 J・R (男性・50代後半・著名人)

マカエンセとは、マカオ生まれでポルトガルの教育・文化を受けて育ち、キリスト教徒である者。ポルトガル人の子孫であることは絶対必要条件ではない。私自身は、現在中国国籍であるが、実際、考え方や立ち居振る舞いはポルトガルの部分が多い。若者たちがアメリカ文化に傾倒せず、マカエンセとしての伝統を守ってくれるように祈っている。

マカエンセの教育・文化関連団体のひとつであるマカエンセ教育推進協会（中国語：澳門土生教育協進會，ポルトガル語：APIM - Associação Promotora da Instrução dos

Macaenses：以下APIMと記載する）の会長，弁護士。2008年3月20日，協会ではなく本人の弁護士事務所（マカオ観光の中心となるセナド広場のすぐ裏手）でインタビューを実施した。オフィスは大きくないが多くの顧客で賑わっていた。インタビューには事務局のS・R氏（後日インタビュー実施）が同席。なお，APIMは同時に海外12箇所にあるマカエンセ・コミュニティの自主組織，カーザ・デ・マカオ（Casa de Macau, 「マカオの家」の意味）を総括するマカエンセ・コミュニティ理事会（Comunidades Macaenses, 2004年結成），マカオ・ガストロノミー協会（Confraria da Gastronomia Macaense, 2007年結成）の事務所も兼ねている。

1952年生まれ（インタビュー当時55歳）。恰幅のいい体型。風貌は中国系が強い顔立ち。言い方は悪いが抜け目のない雰囲気。インタビューの最初で，できれば協会の活動を説明する以外に，個人的なライフヒストリーも語って欲しいと依頼したが，後者に関してはほとんど触れず，全体的にありきたりな回答を用意している感じがした。また，インタビュー中に「あなたはポルトガル国籍ですか？」という筆者の問いに間髪をいれず「私は中国国籍だ」と応じたのが印象的だった。最後の最後に，少しでも自分の話をして，打ち解けた笑顔で記念撮影に応じてくれた。

---

Q 1. あなたにとって，マカエンセとは誰のことを指しますか？

マカエンセは約500年前にポルトガル人がマカオにやってきて定住し，そこに住んでいた中国人と「混血」したときに誕生し，それ以降独特の文化を育んできた。マカエンセは誰のことか，という質問には，マカオ生まれでポルトガルの教育・文化を受けて育った者，そしてキリスト教徒である者，と答える。ポルトガル人の子孫であることはひとつの要因になるが，絶対必要条件ではない。

Q 2. 返還後8年が経過した今（2008年3月時点），返還前と比較して，マカエンセの生活とアイデンティティに何か変化があったと思いますか？ また，あなた自身はどうでしたか？

第二次大戦以降，政情不安や就職の不安から多くのマカエンセたちがアメリカ，カナダ，オーストラリアなど国外に出て行った。しかし，現地で彼らは強いコミュニティを作った。（マカエンセたちの自主組織である）カーザ・デ・マカオ（マカオの家）が各地にできている。

確かに返還を機にマカオは中国の影響を強く受け，マカエンセはその現実を受け入れなくてはならなくなり，中国語を第一に学ぶことが必要となった。また，ビジネスでは

英語が必要となる。しかし、マカエンセのアイデンティティはポルトガル語にあり、教育にある。それをマカオから消滅させてはいけない。マカエンセ教育推進協会はマカオ唯一のポルトガル語の幼稚園を経営している。

マカエンセの伝統を継承していくため、マカエンセ教育推進協会はディアスポラのマカエンセたちを3年に一度集める会合を行なうほか、マカオ料理を守る会や、パトゥア語<sup>(20)</sup>の伝統を守るためにさまざまな努力をしている。こうした活動に対して中国政府は非常に協力的であり、財政的な助成を行ってくれている。

Q 3. 返還を機にマカエンセの団結は強くなりましたか、それとも弱くなりましたか？

それはあなたのような外部の人間のほうがよく見えるのではないと思う。たとえば私や、ここにいるS・R氏(秘書のマカエンセ、男性・60代後半)はマカエンセの団結のために日々努力している。しかし、マカエンセ関連の団体の間でも意見の相違があり、全員が一致団結しているとは言いがたいのが事実である。

Q 4. マカエンセとそのアイデンティティの未来はどうなると思いますか？

心配なのはマカオのアメリカ化が進んできていることだ。マクドナルドしかり、スターバックスしかり、どんどんとアメリカの資本が進出し、若者がアメリカ文化に傾倒しているのが心配だ。彼らが今後、マカエンセとしての伝統を守ってくれるように祈っている。

Q 5. あなたのマカエンセとしてのアイデンティティの中に、「ポルトガリダーデ」(ポルトガル語:portugalidade, ポルトガルの精神性や価値観, ポルトガルとのつながり)を感じますか？

一言では答えられない。私自身は、現在中国国籍であるが、実際、ものの考え方や立ち居振る舞いはポルトガルの部分が多い。最初の妻はポルトガル人であったが子供はなく離婚した。現在の二度目の妻は中国人で、子供が二人いる。現在の妻との生活はかなり中国式になっている。よってポルトガルと中国、両方の部分が自分の中にある。

\*\*\*\*\*

(20) 注10参照。



### 〈ケース7〉M・S (男性・推定60代前半・著名人)

もはやポルトガル人の血を引き、ポルトガル語の教育を受けているということでマカエンセを定義するのは古い考え方だ。マカエンセとはすべてのマカオの住人をさす。マカエンセという小さなコミュニティに特定されず、ポルトガル語圏の地域のひとつとして、マカオに住む人々すべてがより良い生活を求めて発展していくことが目標となる。

マカオ・オリンピック委員会 (中国語: 澳門奧林匹克委員會, ポルトガル語: Comité Olímpico de Macau) ならびにポルトガル語圏諸国オリンピック委員会 (中国語: 葡語系奧林匹克委員會, ポルトガル語: Comités Olímpicos de Língua Oficial Portuguesa) 会長。3月19日午前10時半ごろ、わざわざホテルまでポルトガル人秘書がドライバーとともに迎えに来てくれる。オリンピック委員会はマカオ本島から橋をわたった隣のタイパ島にある。大きなビル全体が委員会の建物になっており、内部はオリンピック関連の写真や賞状、グッズなどで飾られている。インタビューはこのビル内の本人のオフィスで実施した。

年齢はどの記録にも記載されていないため不明だが、推定60代前半。顔立ちはご本人が「口を開かなければ完璧な中国人ですよ」と言うように完全な中国系だが、非常に流暢で完璧なポルトガル語を話す。マカオに生まれ育ち、教育はすべてマカオで受けている自称「生粋のマカエンセ」。身体中に自信がみなぎり、相手に隙を与えない感じではあるが、明るい笑顔がとても印象的な人物である。スポーツ部門を通してアジアのポルトガル語圏諸国・地域をまとめている組織のトップであるために、非常にコスモポリタンの思考、すなわち「マカエンセはエスニック・マイノリティのコミュニティである」という過去の捉え方を捨て、もっと広い意味でのルゾフォニアの一員として捉えるべきだという前向きな姿勢が感じられた。

インタビュー当初から、筆者からの質問になるべく短く簡潔に答えるという受け答えの形で、じっくりと語ってくれるという雰囲気は皆無であったため、個人的なライフストーリーは一切語ってくれなかった。

---

#### Q 1. あなたにとって、マカエンセとは誰のことを指しますか？

社会的に定義されている「マカエンセ」とは、ポルトガル人の血をひき、マカオに生まれ、ポルトガル式の教育を受けた者のことを指す。しかし、もはやポルトガル人の血を引き、ポルトガル語の教育を受けているということでマカエンセを定義するのは古い

考え方だ。私にとってマカエンセとはすべてのマカオの住人をさす。

一般的に定義されるマカエンセの中には、今現在、市議員ほか、返還前にはなかった政府の重要なポストについているものもあり、その点では優遇措置がなされているように見えるが、実際マカエンセが優遇されていると言う事実はない。ただ、二重国籍を認めない中国が、多重国籍を認めるポルトガルのもと、中国とポルトガル双方の両方の国籍を持ち続けているマカエンセが住むマカオに対して、非常に理解のある態度で対応していることは事実である。中国政府が現在その価値を認めているのはマカオと、マカオの住人に対してであって、マイノリティであるマカエンセだけに絞っているのではない。

自分自身はマカエンセで、ポルトガル国籍を持っているが、国籍にはあまりとらわれない。三つのフィーリングが自分の中にはある、すなわちポルトガルの志向（考え方）と、中国的な外見と、マカエンセ的な文化。自分にとってポルトガルは最も近い存在であるので、中国や他の国と比べまったく違う存在ではある。

三年ごとに行われている、主にディアスポラのマカエンセを中心とした会合は、はっきり言ってあまり意味がないと思う。マカエンセの子ども達を一時的に呼び集めて、いわゆる「伝統的なマカオ料理」を食べているだけだ。彼らを集めた上で、どのようにしてマカエンセのコミュニティを発展させていこうかという将来への展望がそこにはない。

Q 2. マカエンセとそのアイデンティティの未来はどうなると思いますか？

マカエンセという小さなコミュニティに特定されず、ポルトガル語圏の地域のひとつとして、マカオに住む人々すべてがより良い生活を求めて発展していくことが目標となる。

Q 3. 「マカエンセがポルトガル語と中国語を駆使してポルトガル語圏アフリカ諸国と中国との架け橋になっている」という事実はないでしょうか？

その考え方は間違っている。そうした捉え方は過去のものだ。

\*\*\*\*\*

## 〈ケース8〉J・R（男性・60代前半・著名人）

マカエンセは本質的にマカオとつながっている者であり、マカオを故郷と感じ、愛し、思考の中心にマカオがある。異なる文化を理解する能力を持ち、多言語を話す、これがマカエンセのアイデンティティだ。中国政府もマカエンセ・コミュニティが独特なマカオ文化の担い手としての役割を担い続けることを期待している。ポルトガルと歩みをともにしてきた我々マカエンセは、さまざまな批判をしながらも、心の奥底では今も変わらずポルトガルを遠くにある祖国として考えつづけているのだ。マカエンセはどのような状況下でも生き残る術と自信を身につけている。いままで数百年生き残ってきたのだから、これから五十年でも、そして永遠に生き残っていくかもしれない。

2008年3月28日にマカオ半島中心部にあるオフィス内でインタビュー実施。マカオ国際研究所（中国語：澳門國際研究所、ポルトガル語：Instituto Internacional de Macau）会長。

1943年生まれ（インタビュー当時64歳）。マカエンセの旧家のひとつであるR家出身で、自分は九代目。顔立ちは西洋と東洋をちょうど調和させたような雰囲気。同じく伝統を誇るマカエンセ・ファミリーであるS・F家出身の妻と、ポルトガルで勉強している娘がひとりいる。

筆者が最初の質問をするなり、立て板に水といった語り口でほぼ一時間ノンストップで話し続けた。返還前、歴代総督の直属の補佐官を務めたという経歴からか、マカオ全体の歴史についての話にはほぼ終始し、自らのライフヒストリーや自分個人の経験についてはまったく語ってもらうことができなかった。

マカエンセのいわば「紳士録」によれば、マカオ生まれ、父親はマカエンセ、母親はドイツ人（もしくはドイツ系二世）。リスボン、ボン、ケンブリッジの大学で大学教育を受けたあと、軍人としてギニアビサウに赴任、マカオ帰還後は1976～1980年にマカオ議会の議員を務めた。同時にマカオ政府の観光・情報・広報部門のトップとして、またマカオ総督補佐官（教育・文化・観光・行政部門）を最後の総督まで6代にわたって務めた。そのほかにも数多くの観光・教育関連協会のトップを歴任。いわゆる文化面でのマカエンセの代表者とも言えるだろう。百戦錬磨のつわものといった風貌で、非常に闊達だが反面抜け目のない印象は否めない。

会長室にはポルトガルや中国の首脳たちと撮影した写真が所狭しと飾ってある。また、ポルトガルの中世の大詩人であるカモンイスの銅像の写真が中央に飾られているが、本人によると「今まで部屋にポルトガルの大統領の写真も首相の写真も飾ったことはないが、

かならずカモンイスの銅像の写真は欠かさず飾っているようだ。

Q 1. あなたにとって、マカエンセとは誰のことを指しますか<sup>(21)</sup>？

マカエンセのコミュニティについて定義することは容易ではない。しかし長期間にわたって西洋と東洋の文化の出会いがあった結果この小さなコミュニティが生まれ、この街に独特のアイデンティティを誕生させた。マカオという街の特徴は世界中他に例を見ないものだ。それはポルトガル、広くいえば西洋が最も長く永続的にとどまった東洋の街であるからだ。ポルトガル人は16世紀に貿易とキリスト教布教を目的としてマカオに到着した。すなわち当初マカオにやってきたポルトガル人は商人、宣教師、船乗りの男性だった。長期にわたる航海のため女性はいなかった。彼らはポルトガルを出てアフリカ沿岸に沿って航海したのちインドに到着し、領土拡大をめざしてマレーシア沿岸そして当時国際貿易の中心地であったマラッカへと進んだ。そしてさらに遠くへと進み、中国、日本を視野に入れた。最終的に貿易船の停泊地、貿易中継地としてマカオを選び、ポルトガル人が駐留することになった。その前後の歴史についてはいろいろな説があり、ポルトガル船がマカオ海域の海賊を退治したためにマカオ駐留を許されたというエピソードがあるが、中国側ではそうは言っていない。すなわちポルトガル人は当初、貿易交渉の場としてマカオに滞在することを許され、そのまま非公式に滞在するようになり、のちに少しずつその存在が許され、長期間にわたって滞在するようになり、コミュニティが出来上がっていったというものである。

これらのポルトガル人男性たちは、航海の途中で滞在した場所で出会った東南アジアの女性たちを同伴してマカオにやってきた。つまり最初のマカエンセとはポルトガル人男性とこうした女性たちを両親として生まれた。その後、中国人女性との混血も行なわれた。中国人男性とポルトガル人もしくはポルトガル系の女性とのカップルは非常に稀であり、20世紀になるまでほとんどなかった。

ポルトガル人は他のヨーロッパ諸国に比べて、現地社会に対する適応力がずっと優れ

(21) インフォーマントの著書である『*Falar de Nós: Macau e a Comunidade Macaense* (我々について語る－マカオとマカエンセのコミュニティ)』第一巻巻末に、筆者の質問1と全く同じ問いに対する次のような回答が記載されている。―「エスニック上(血統)の特徴や生まれた場所よりも、精神・魂のありかたにマカエンセの特徴がある。マカエンセは本質的にマカオとつながっている者であり、マカオを故郷と感じ、愛し、思考の中心にマカオがあり、つねにマカオをひとつのリファレンスとしている者である。」[Rangel, Jorge A.H. *Falar de Nós – I Macau e a Comunidade Macaense*. Macau (2004): Instituto Internacional de Macau, 2004: 263]

ていた。現地住民に対する差別意識も低かったため、現地女性との結婚、そして子作りもスムーズに進み、世界中にポルトガル人の子孫が生まれた。こうしてマカオでもポルトガル人男性と現地女性との交婚が行なわれた。これらのポルトガル人男性はカトリック教徒であり、宣教師たちも随行していたため、マカオに小さな教会をいくつも建立し、また子どもたちの教育の場として学校を設立しコミュニティは発展していった。そして19世紀、ヨーロッパ諸国が次々と中国南部に進出してきた時代に、すでにマカオに滞在していたポルトガルのフェレイラ・デ・アマラル総督（昔マカオに銅像があったが、今はポルトガルにある）はそれまでの中国との国境を広げた。マカオは当初、国境に沿って塙が張り巡らされた、「キリシタン地区」と呼ばれる小さな集落に過ぎなかったが、その後その塙が取り去られて領域が広がり、多くの人々がマカオに出入りするようになった。イギリス人、ドイツ人、ロシア人、日本人など他の外国人にとっても中国人との交渉が持てる場というのはここマカオしかなかった。こうした血縁と文化的な歴史的背景のもと、西洋と東洋の文化と血が混ざり合ってマカエンセとそのコミュニティが作られていったのである。

その後、時間とともにマカエンセ・コミュニティは確立していった。それは、ポルトガルが地理的に遠いこと、また支配者であるポルトガル人と一般住民のほとんどを占める中国人との間の連携役としてマカエンセのコミュニティが必要とされたからである。こうして（現代になると）マカエンセはすべての公務員職に就き、中間層および連携役として活躍した。中国語学校は数多くあったが、ポルトガル語の学校は四校、私の母校であるリセウ（普通中学・高等学校）、商業学校、ドン・ボスコ・コレジオ、サン・ジョゼ・セミナリオがあった。セミナリオには通学制と寄宿制があり、寄宿制では聖職者教育を行ない、通学制は外部の学生を受け入れて卒業後は公務員になる者もいれば、聖職者の道を選ぶ者もいた。またこれらの学校を卒業後、希望者には大学進学の日もあったが、マカオにおける大学教育については問題があった。初期にはイエズス会による偉大な大学が存在したが、マカオからイエズス会士が追放されることによってなくなってしまったのである。ようやく20世紀の終わり、1981年になって私立大学が設立され、1991年に公立の澳門（マカオ）大学となった。一連の準備には私も尽力した。その後、マカオ理工学院が設立され、私は初代学長であった。同学院には教育学、観光学などの分野がある。

私は1966年から99年返還まで歴代のマカオ総督の補佐として働き、ポルトガル共和国政府から万一の場合は総督に代わる人物として拝命された。また返還に関連する一連の行事にも関わり大変努力した。

1920年代から1940年代、上海は非常に進んだ国際都市だった。多くのマカエンセが上海で就職した。初期の香港もマカエンセの努力によって発展した。香港はイギリス領ではあったが、多くの人的資源は英語、広東語を話せるマカエンセによるものだった。そ

のほかにポルトガル語も話すマカエンセは大きなコミュニティを香港に築いた。香港における「ポルトガル人コミュニティ」(筆者注: 当時香港, 上海では, マカエンセは「ポルトガル人」と呼ばれていた)の歴史に関する書籍も最近出版されている。そのコミュニティのほとんどがマカエンセであった。このようにマカエンセはマカオにだけではなく, 香港, そして上海にも大きなコミュニティを持ち, その能力を活かしそれぞれの都市の発展に尽くしたのである。マカエンセ・コミュニティはマカオの歴史と盛衰をともにして歩んできた。マカオは香港ができるまで (=英領となるまで) は大きな重要性を持っていた。その後経済の中心は香港に移り, 小さな街にすぎないマカオは困難な時代に直面した。そのほか中国が関わった戦争の影響を受けるなど, 多くの試練があったが, マカオは驚異的にも生き残ってきた。マカオは非常にフレキシブル (しなやか) だが根は強い「竹」になぞらえられる。マカオは台風の土地である。台風は竹をなぎ倒していくが, 過ぎていったあと, 竹はもう一度立ち直り元の生活を続ける。それは我々の生き残る術の見本であり, 我々の精神でもある。大きいものであろうが小さいものであろうが台風は来るに任せ, どんなに散らされても, そのあと見事に立ち直り, 成長を続けていく。マカオの歴史はまさに「竹」の歴史なのである。

そしてマカエンセ・コミュニティも同様に, 「耐える能力」をもち, 状況にフレキシブルであり, 与えられる状況にすべて適応し, 生き残っていく。中国だけでなく, ポルトガルもこのコミュニティを理解してくれない時代もあった。しかしマカエンセは中国とポルトガル, ふたつの権力の利害を理解し調和させながら長年にわたって生き残ってきた。人びとは異なる文化を理解する能力を持ち, 多言語を話す, これがマカエンセのアイデンティティだ。長年にわたる文化混交, そして, ポルトガルとの緊密な関係。たとえば為政者であるポルトガル人はマカオのことを何も知らずに赴任する。マカエンセはこうしたポルトガル人と現地住民との間を取り持ち, 調和した関係を構築する術を持ち, ポルトガルの行政担当者を助けた。これが最初から1999年までの状況だ。

もちろんそれまでも色々政治体制の変化はあったがポルトガル行政下という点は変わらなかった。さて, 99年以降はどうなるのだろうか。いつものような台風なのか, それとももっと別のものになるのか。幸運なことが二点あった。ひとつは, ポルトガルと中国双方が「平和的な返還」を望んだことである。通常政治体制が変化する際には内乱や革命が起こり暴力的状況に陥るものだが, マカオの場合は異なり, 両国の理解のもとに作業が行なわれた。中国が自国の領土を行政下に置き, (1987年に中ポ共同宣言が発表されてから, 1999年までの) 12年間を移行準備期間とした。このような手続きを踏んだのは中国史上初めてのことでないだろうか。香港, マカオを将来も中国の役に立たせるようにする。中国は非常にプラグマティックな国家だ。中国はイギリス・ポルトガルと交渉し平和的な解決をみた。それは, 香港もマカオも絶対にそれぞれの植民地ではなく, 外国の行政下にある中国領土であるということだ。ポルトガルはそれに



同意した。1976年に制定されたマカオ組織章程の中でポルトガルは「マカオはポルトガル行政下にある領土である」という言い方をした。中国領とは言わないが、「マカオはポルトガルの領土ではなく、ポルトガルの行政下にある」という含みがある。この時点ではマカオを巡る二種類の異なる表現があったのだ。つまり中国は「外国の行政下にある中国領土」と言い、ポルトガルは「ポルトガル行政下にある領土」だとした（※電話のためインタビューが数分間中断）。

マカオの未来について疑問符を投げかける動きが沸き起こったときには、幸運なことにマカエンセ関連の協会が多く設立されていた。そのうちのひとつは100年以上の歴史を持つマカエンセ教育推進協会（中国語：澳門土生教育協進會，ポルトガル語：APIM - Associação Promotora da Instrução dos Macaenses）<sup>22</sup>がある。各協会には理事会と総会があるが、私は後者の会長。そのほか古い歴史を持つものにはポルトガル統治が開始した頃から存在する救貧院（中国語：仁慈堂，ポルトガル語：Santa Casa da Misericórdia）がある。これらの協会は、移行期間中、マカエンセの将来に関する問題解決に自信を持たせることに貢献した。二つの国家が同時に調和のとれた解決法を見つけようとしたとき、それはマカオの返還という目的、結論に達した。12年間の移行期間中、さまざまな困難はあったが、私が新しい政府の組織と人員配置の采配を担当した。

（聖パウロ寺院跡の前で撮影された団体写真を指して）これは99年12月18日に撮影した「マカオ総督の送別会」のときのもの。ここに写っているのは現在のマカオ行政のトップたち。皆ここに写っている。最後のマカオ総督が、中国マカオの行政トップとなる人びとに囲まれて送別会をしてもらっている、この姿がマカオの特徴だ。新しいマカオの特徴は「マカオの現地民による政治」であるが、それには人々が大学教育を受ける必要性があった。しかしマカオは1981年になってはじめて私立大学が1校創設され91年に公立となったものの、（99年までに）人材養成を行なうにはあまりにも短い期間だった。教育部門では大きな発展があった。選ばれるべき有能な人間を育てること、有能な人材を選び、かれらを新しいポストに振り分けること、それが私の責任、役目だった。

そして99年12月19日までにこれらのポストがすべて選ばれ、返還の前後に突然切り替わることもないようにも努力した。ポルトガル行政下から中国行政下に代わることによって変化が起こるということにはならないように。公務員であっても議員であっても返還前日のポストが返還翌日も変わらず続く、それには成功した。事実上変わったのは「国旗」と行政のトップ。マカオ総督が去り、行政長官にエドモンド・ホー（何厚鏞）が就任した。公務員の部課長など（の役職者）は変わらないまま。この一連の作業は大変なものであったが、われわれは成功した。そしてマカエンセのコミュニティに対しても、ここマカオに残ることに意味があることを理解してもらうように説得をした。

<sup>22</sup> ケース6参照。

しかし同時に彼らに対してさまざまなチャンスを与えた。

彼らには四つの選択肢があった。第一に、返還時に公務員を退職して退職金を受給する（最低一年以上勤務した者に対して）。第二に、返還より前に早期退職をする。第三に、ポルトガルに移住する。これらの者をポルトガル社会は受け入れる（約束をした）<sup>(23)</sup>。第四に、今までどおりここマカオに残る。…こうして私は、なるべく多くのマカエンセたちにマカオに残ってもらえるように努力した。なぜならもし全員がマカオを出てしまったら、中ボ宣言で唱えた精神や我々の努力が水泡に帰すからだ。幸せなことに多くの人々が残ってくれた。そして行政長官のエドモンド・ホー（何厚鏘）は人々の信任が厚い。父親はマカオ社会にとって重要な人物であり、中ボ関係をうまく取り持ってくれた。銀行の頭取で裕福、北京の議会議員であり、マカオ生まれではないが全生涯をマカオで暮らした。エドモンド・ホーはマカオに生まれた。ポルトガル語も堪能で、マカエンセ・コミュニティのこともよく理解し、同時に中国人コミュニティにも好意的に受け入れられている。今のところ、行政長官としては適切な文句なしの人物だ<sup>(24)</sup>。彼は長年にわたり議員として議会とともに歩み、人々の信頼を勝ち取って行政長官に選ばれた。

当時、マカオの財政状況はあまり良くなかった。97年にはアジア全体が不況になり、小規模で閉鎖的なマカオは大きな影響を蒙った。マカオの通貨は国際為替市場に参加しておらず、我々もそれを望んでいなかった。なぜなら我々は香港の通貨を通じて（マカオのパタカに3%上乗せした形）世界中の通貨への両替をすることができるからだ。中国はマカオがパタカを現地通貨として（返還後も）使用することを許可し、マカオの資金・財政面でも自治を認め、現地民による政治、今までどおりの文化普及活動、資本主義体制の維持を認めた。つまり、返還前のマカオにあった制度はすべて認められたのである。そして急激な経済成長や人口増は生活の複雑化という問題をもたらした。家賃や物件の値段が急激に高騰して生活しにくくなり、社会福祉面でも不十分な点が目立つ。

そのいっぽう、政府の財源は豊かになっているので、保健衛生面、教育面、他の社会面でもっと貢献をしてもらいたい。また、言葉は中国語が公用語になったが、ポルトガル語も公用語に残るので、マカエンセたちは引き続きポルトガル語を使い、通訳、翻訳の立場などで活躍することができる。

行政のトップ、エドモンド・ホーはマカエンセのコミュニティをよく知っている。私は彼の父親と議員時代の仲間であり彼のことも若いときから良く知っていた。彼は有能なだけでなくとてもさっぱりした性格の持ち主だ。彼はマカエンセの代表者たちを集め

(23) 返還を機に、ポルトガルに移住するマカエンセの公務員にはポルトガルにおいてマカオと同等の役職を獲得することが約束されていた。

(24) エドモンド・ホー（何厚鏘）に関しては、注19参照。

て昼食会や夕食会なども行っている。会議の場で集まるよりもずっと自発的な意見を得ることができるからだ。しかもラウンドテーブルを使ってひとりひとりが全員と話が出来るように工夫している。また、我々のような協会関係者とも密なコンタクトを取ってくれている。我々も彼と自由な意見交換ができる。お互いのコミュニケーションをうまく取るこのやり方は大変良いと思う。

こうして我々マカエンセ・コミュニティも行政に対して問題点や不安点、将来に関することについて自由に伝えることができる。今までのところ、政治体制はうまく行っていると思う。中国政府もマカエンセ・コミュニティが担う特別な役割を理解している。われわれは独特なマカオ文化の担い手であるから。中国政府もマカエンセが（その役割を）担い続けることを期待している。選挙民にも選出されることができるし、協会そのものがコミュニティ維持のために政府と協力体制にある。

少し長くなったが、これがマカエンセのコミュニティの特徴である。我々はすべての分野で有能なプロとして活躍しているし、各協会は政府から協力や助成を受けている。そして宗教的にはカトリック。マカエンセにはカトリック教徒が多いため、生活の中でのカトリック的価値観やモラルを大事にし、それを世代間に伝えている。

そしてポルトガルとの絆。長い年月にわたってここにとどまっていたポルトガルの記憶がある。「ポルトガル本国から発せられるポルトガルの便り、ポルトガルの情報が発信が、遠い地にいる私たちの心に届き、ポルトガルとの強いつながりを残した」。私はこのフレーズを言うのが好きだ。とてもセンチメンタルな、そして我々のポルトガルとの特別な関係を表すフレーズだ。ポルトガルで何かよくないことが起これば我々も苦しむ。ポルトガル人がポルトガルに対して感じる同じ苦悩を我々も持つ。何があってもポルトガルと歩みをともにしてきた我々マカエンセは、ポルトガルに対してややもすればさまざまな批判をするが、心の奥底では今も変わらずポルトガルを遠くにある祖国として考えつづけているのだ。

こんにち、中国社会のもつ力は強大だ。中国政府はマカエンセに対して国籍の選択権を与えた。つまり、中国政府はマカオに生まれ、ポルトガル人と中国人の血を引く者も中国国籍を取得することができるとした。いっぽう、ポルトガルは二重国籍を許しているので問題にはならない。つまりポルトガルに関しては問題ないが、中国に関しては、中国国籍を選択すればそれが唯一の国籍となる。最近のことだが、数人（のマカエンセ）が、（中国国籍を選ぶという）この選択をした。それに対して批判の声もあるが、我々はそれに慣れなくてはならない。それぞれの（マカエンセの）選択を尊重しなくてはならない。重要なのは、中国国籍を選んだからといってそれらの人々がわれわれ（マカエンセ・コミュニティ）との関係を切ってしまったということではない。彼らはコミュニティの一員であり続け、また（中国とポルトガルの）コミュニティ間、中国とポルトガルの間、西洋とマカオの価値観の間の橋渡しとなっていることには変わりはない。カトリックと

ポルトガルとの歴史的な関係、このふたつの価値観を絶対的かつファンダメンタルな要素とせず、それらにとらわれずに高い適応能力と周りの状況に適応して自らの形を変えていく力、これらが以前同様マカエンセというコミュニティを強く特徴づけるものだ。

Q 2. 返還後8年が経過した今(2008年3月時点)、返還前と比較して、マカエンセの生活とアイデンティティに何か変化があったと思いますか？(また、あなた自身はどうでしたか？)

マカエンセのアイデンティティは何世代、何世紀にもわたるポルトガルの歴史の中で鍛えられてきた。コミュニティを性格づける価値観は何世紀にもわたる年月の間にさまざまな変化を経てきたし、それはマカエンセ個人のアイデンティティにも大きな影響を与えてきた。立憲君主制から共和制、独裁制による新国家体制(エスタード・ノーヴォ)、4月25日革命による民主制など、さまざまな体制を経て、我々是这样して生き残っている。この歴史の中で、良かった時代もそうでなかった時代もあり、またポルトガルがスペイン王やフランス軍に支配されていた時代もあった。こうしてポルトガルの政治体制の変遷を歴史上何度も経験し、困難な時代を経ながら、マカオは常にポルトガル様式を守って生き残ってきたのだ。戦争も、太平洋戦争には参加していないが、マカオの周囲諸国・地域が事実上すべて日本軍に占領され、戦争の大きな影響を受けたことに違いはない。さらに中国の体制がさまざまに変化した。それでも我々は生き残ってきた。こうしてマカエンセはどのような状況下でも生き残る術と自信を身につけているのだ。いままで数百年生き残ってきたのだから、これから五十年でも、そして永遠に生き残っていくかも知れない。つい昨日のAPIM(マカエンセ教育推進協会)の委員会でのようなことを言っただけだ。我々は特別行政区になって最初の体制のほぼゴール地点にいる。我々はマカエンセのコミュニティに対して非常に特別な温情と援助をもって接してくれた行政長官に深く感謝しなくてはならない。次の行政長官が誰になるのかはまだわからない<sup>(25)</sup>。今こそ我々コミュニティは自分たちの能力と利用価値を再確認するときなのだ。であるから、われわれは、協会会員間の争い、たとえば中国国籍取得者をめぐる批判などをやめねばならない。我々が自分たちの能力を利用価値に変えてこそ、次の行政長官は我々を信頼してくれるだろう。またこれから十年後には体制の変化があるかもしれない。また中国そのものの体制が変わるかもしれない。現在の中国は社会面、環境面、財政面で大きなクエスチョンマークの中にある。我々は皆、中国が問題なく進むことを期待している。中国では中流階級が育ってきており、この階級の人々が市民生活の運営や国の政治に深く関わろうとしている。これらの人々の声を聞いた政治的運営

(25) 注17・注19参照。

が今後の中国の運命を決すると思う。中国は今後、明確で分かりやすく、一貫性を持ち、結果をもたらす政策運営をする必要がある。これを実施しないとかなり危うい状況が発生するだろう。中国の体制が危うくなれば世界の情勢も危うくなる。中国の影響を一番先に被るのは隣にいる我々だ。今のマカオの急成長も中国のおかげだ。表面上は、突然何百万人もの裕福な中国人が現れ、カジノやホテルが林立している。かれらが一晩で何十億もの掛け金を失うおかげでこれらのビジネスが機能している。マカオの現状はこのように非常に複雑である。しかし、「挑戦のないところには未来もない」。危険はつねに生じるが、我々はそれを乗り越える能力を持っている。もしこの状況を乗り越えることが出来たら、早期に我々は生き残る道を見出すことができるだろう。

私は返還前の25年間、6代のマカオ総督とともに歩んできた。その間にさまざまな体制の変化があり、良い状況も悪い状況も体験した。だからこそマカオについて語るときには熱がこもる。国際会議などでマカオについて話す時にはいまのようにマカオの発展の歴史から話し始める。マカオの歴史は魅力にあふれている。中国は近年になって西洋社会に門戸を開いたが、日本はずっと前から西洋とのつながりを持ってきた。だからこそ今の日本がある。日本人はマカオという宝について良き理解をすることができるだろう。

（著者に対し）あなたがマカエンセという難しいテーマについて研究してくれるのは嬉しいことだ。他に誰と話をしたかは知らないが、もちろん皆が私の意見と同じではないだろう。

私は、マカエンセに関して意見を述べる時、マカオの歴史を踏まえかつマカエンセがどのような貢献を果たしてきたかと言ったことに主眼を置く。そう、マカオと言ったコミュニティの中でマカエンセがどのような役割を果たしてきたかが主題となるのだ。マカエンセ・コミュニティに対し、それほど多くの苦言はない。当然批判はする。しかし、それらの批判はどちらかと言うとピンポイントなものだ。ポルトガルのことわざにあるように、「木を見て森を語る」ことを私はしない。森の中には悪い木もあるだろう。しかし、その木のために全体を悪いものと考えことはしない。だからこそ問題を特定し、それに対する有効な対策を提案できるのだと思う。これはだめ、あれもだめ、だからすべてがだめとは言わない。全体に対して出来るだけオープンな姿勢を維持するよう心がけている。そして、ひとつははっきりしていることは、私が携わってきたマカオの歴史は成功の歴史であること。ポルトガルと中国は返還と言った目的に達するためにピンポイントの批判や指摘を繰り返してその目的を達成した。それと同じことをしているに過ぎない。全体的な視野からピンポイントで批判や指摘をする。そして、変換後の八年の歴史も成功の歴史だったと言える。一国二制度がマカオでは成功しているのである。一国二制度と紙に書くことは簡単だが、それを実際に具現化することは非常に難しい。マカオは来年（2009年）返還十周年を迎える。私はマカオの取ってきたこの均衡について



スポン、ポルトの国際会議で話をする予定だ。また十周年の展示会をアメリカ合衆国のスタンフォード大学から回覧していく予定だ。我々の組織は非政治団体であるのでこのような活動ができる。政府は常に良い点しか発表しない、悪い点は隠すものだ。それに比べ我々は良い点も悪い点も含めた均衡のとれた意見を述べることができる。だからこそ政府はわれわれと意見交換をする。昨日も中国外務省のマカオ駐在代表が我々の協会を訪問し長時間にわたって話をした。

当協会は1999年に設立され、マカオの政治社会情勢や中国との関係、アジア経済とマカオとの関連、カジノの急成長に関する問題、未来への展望などに関して、自由な我々の意見を提供している。以前このような研究組織はなく、大学も新設校ばかりなので(不十分である)。(好況である)現状を維持するためにどのような方法をとっていくべきなのか。つい最近、中国の行政問題のシンクタンクにマカオの行政に関する提言書を送ったばかりだ。さまざまな案件について我々の意見を述べるときには、かならずしもその調査依頼者を喜ばせるような内容になるわけではなく、「ひとつの意見、我々独自の意見として理解してほしい」と言っている。また、世界の大学、研究所とも協力体制を敷き、プロジェクトを実施している。世界中に各分野での研究者のネットワークを持っている。そして賃金、謝金は発生していない。五人の職員以外の研究者たちはすべてボランティアとして活動している。マカオ関連のプロジェクトを行なうときは、それらの研究者たちが協力してくれ、あっという間に資料が揃う。現在世界を舞台に二つの展示をおこなっている。ひとつはアメリカとカナダを巡回中で、三年間かけて五十ヶ所で展開する予定。これらの展示会はそれぞれの主催者に任されているので、まったく経費がかからない。もしこれがマカオ政府主催によるものであったら、レセプションや要職者の招待など、大変なお金がかかってしまうだろう。

(続く)